

## いのちとくらしを守るあたたかな経済

### ～ワーカーズ・コレクティブで広げよう！社会的連帯経済～

をテーマに、全体会及び6つの分科会が行われました。

#### 全体会報告

**基調講演 藤井敦史** 立教大学コミュニティ福祉学部教授  
ワーカーズ・コレクティブと社会的連帯経済  
～これからの発展戦略を考える～

藤井敦史先生には、これまで20年以上に渡り、神奈川のワーカーズ・コレクティブを研究者の立場から、また運動を応援いただいていた経緯があります。前半は、社会的連帯経済とは何か？について、後半は、今後に向けての2つの問題「ワーカーズ・コレクティブと生活クラブ生協にとっての社会的連帯経済」「社会的連帯経済と協同労働の今後に向けての提言」について示唆を頂きました。

#### 「ワーカーズ・コレクティブと生活クラブにとっての社会的連帯経済について」

ワーカーズ・コレクティブにとって、労働者協同組合法の施行により、法律上の労働者性の分断を乗り越えられるのか？また母体である生活クラブとの関係をいかにして再構築するのか？ワーカーズ・コレクティブを社会化するとはどういうことか？誰でも働ける仕事場を作っていく事の追求は？持続可能な発展の条件は何なのか？という課

題を挙げながら、ワーカーズ・コレクティブにおける三つの社会的価値①社会的有用性やまちづくり(生産される物の価値)②民主的参加と協働、職場のもつ包摂性(労働過程の価値)③経済的自立・最低賃金以上の給与(労働報酬の価値)を挙げ、競争の激しい市場環境での同時達成は困難、出来たとしても簡単なことではない。三つの社会的価値を実現するためには、互酬性(social capital)、信頼や助け合い、寄付やボランティアや公的資金を含めた再分配など多元的な経済＝社会的連帯経済が必要だと、話がありました。ここで、はたらつく・ざまの事例を取り上げ、ワーカーズ・コレクティブは、地域づくりに向かわざるをえない。誰でも住み続けることのできる地域を「つながり＝連帯」をつくりながら、政治(政策)と経済(仕事、生活)両方の側面から作っていくことを、強調されていました。

#### 「社会的連帯経済と協同労働の今後に向けての提言」

日本の社会的連帯経済を可視化する取り組み事例として、「地域協同組合無茶々園」の事例を紹介。生産者と消費者が連帯し、生産に係るリスクの共有や、有機農業運動、労働者協同組合運動という理念の共有、都市と農村が連携した産直構想など、多元的なつながりを持ちながら、三つの社会的価値の実現をめざす事例でした。今後のワーカーズ・コレクティブの発展に向けて、学習、外部視察の必要性、コミュニティ協同組合構想(マルチステークホルダーによる地域づくり)、若い世代の参加に開かれた組織づくり、若者との接点を多様な形でつくる(インターンシップ)を、挙げていました。頂いた提言を今後の事業や活動に生かし、地域での実態づくりに、取り組んでいきたいと思えます。

(上田祐子)



## 自主企画報告

第1企画 スペインの社会的連帯経済の活動を知ろう  
 (一社)ワーカーズ・コレクティブぷろぼの工房

講師:サルバドル・ペレス  
 (スペインバレンシア州連帯経済ネットワーク元代表)

(目的)  
 社会的連帯経済の先進国と言えるスペインで、連帯経済のリーダーとして活躍するサルバドル・ペレスさんから、具体的な活動内容や連帯の方法などについてお聞きし、日本での実践に役立てます。



ワーカーズ・コレクティブ全国会議で、スペインバレンシア州連帯経済ネットワークの元代表の話しを聞く企画がありました。通訳はジャーナリストの工藤律子さん。「ルポ雇用なしで生きる一スペイン発『もうひとつの生き方』への挑戦」、「ルポつながりの経済を創る」などの著書があります。

最初はスペインの労働者協同組合の実践による連帯経済の動画を見ました。ワーカーズ・コレクティブによるレストランなどは日本にもありますが、携帯会社や不動産などスペインではいろいろな労働者協同組合があります。

でもこのときの話は労働者協同組合の話ではなく、堆肥づくりを通しての人々の連帯づくりでした。法律が変わったことで、市民が生ごみを回収して堆肥づくりができるようになったのです。生ごみの回収から堆肥づくり、堆肥の活用を通じて、今まで縁のなかった人達がつながり、堆肥づくりが畑づくりなど次への事業へと転換していく。目的は堆肥づくりではなく、人々が連帯できるということの実証でした。

スペインの中間支援組織は、人々の連帯づくりのための仕掛けをいろいろしているようです。参加した協会メンバーはスペインの社会的連帯経済の実践に感動して、今年の総会フォーラムをこのテーマで行うことにしました。(まつかわゆみ)



#### 第4分科会

共に働かっていいね！～フラットな働く場づくり



今回の共に働く分科会は、前半は当事者中心、後半はその団体の代表者による「共に働くために大事にしていること」の報告がありました。

愛媛県松山市にあるワーカーズ・コレクティブ・ピースの門田高明さん(当事者)は、障害者雇用で有名な某ハンバーガーチェーン店で働き始めたけど、会社のトップの理念が現場には伝わってなくて辛い思いをし、その後、ワーカーズ・コレクティブという働き方を知ってお母さんや仲間と共に古紙回収・石けん清掃やカフェの事業を2012年に立ち上げました。残念ながら、古紙の価格が下がったことから今年3月で解散するそうです。

札幌障害者活動支援センターライフは共同連の仲間。ここも他の共同連と同じく、障害者の事業所として制度の限界を感じていて、社会的協同組合の実現を求めています。

ワーカーズ・コレクティブ紙風船は1995年に設立し、レストラン、リサイクルなどを行っています。2019年に就労継続支援B型の事業所となりました。事業は安定してきてもそこで新たな葛藤が生まれました。

B型の事業所は、働く人は利用者と指導員と明確に分かれてしまいます。ここも共同連の悩みと同じです。障害者制度の中では健常者と障害者の線引きができてしまうこと。

次に、アーバンズ合同会社。ここは本当に面白い事業所です。コミュニケーションが苦手面接に応募できないシェフ、すぐに会社を辞めてしまう技術者、売れない歌手。そんな働きにくさを感じている小学校の同級生同士が、「どうせどっかに入っても低賃金なら自分たちで好きなことをやった方がいい」と会社を立ち上げました。まだ30代で、エジプト料理の「コシャリ屋」水たばこの店、動画作成などを手掛けています。

最後は、神奈川の福祉クラブ生協。ここは参加型福祉の実践から「地域の障害者、若者」とも共に働く方針をもっています。協会の実習生が実習後に福祉クラブのワーカーズのメンバーになって働いている人も多いところ。実習から入り、ワーカーズ・コレクティブになっていくということが、実習協力の経験が少ない神奈川以外の地域の団体には理解が今一つだったと思います。



参加したはっぴいさんのメンバーたちはアーバンズの働き方にとっても興味を持ったようで、自分たちもアーバンズのようにメンバーの得意を活かして事業を活性化させたいと話していました。(まつかわゆみ)

## 第5分科会

### GSEF(Global Social Economy Forum)の 報告から社会的連帯経済を学ぶ

第5分科会のテーマは「いのちと暮らしを守るあたたかな経済～ワーカーズ・コレクティブで広げよう！社会的連帯経済」で、連帯経済づくしの2日間でした。

明治大学の柳沢敏勝さんのお話は、2022年6月のILO総会で社会的連帯経済(SSE)を議題とすることを決定、2023年4月の国連総会では「持続発展に向けた社会的連帯経済の促進」を決議したが、国際的な議論の中で日本はその歴史的瞬間の報道もされなかったそうです。



なぜ日本がSSEを軽視しているかと言うと、自己責任論が幅を利かす異様な日本社会では共助が忘却の彼方にあることが大きく、共助のための組織である協同組合、共済組織、アソシエーション、社会的企業の存在を軽んじられているからとの事でした。さて、そうは言っても協同組合陣営の私たちは「何をすべきか」ですが、昨年の5月に開催されたGSEF(社会的連帯経済を推進する会)ダカール大会では、日本から3団体がプレゼンした報告がありました。

生活クラブの生産地である庄内で実践している取り組みは、生活クラブが進めてきた食の自治と産地形成のこれからの40年を考える壮大なテーマであり、

都市圏と産地圏で共通する持続可能なあり方を模索し実態を創っている内容でした。具体的には、庄内エリアFEC自給ネットワーク構想です。全国の生活クラブグループの参加・協力で生産、環境、雇用の維持・発展を目指しています。

次に「東日本大震災における漁業崩壊からの復興—協同組合と地方政府—」のタイトルで宮城県と岩手県沿岸漁業の復興にむけた報告でした。外部資本を導入し大規模、企業化した漁業の復活をめざした宮城県と漁業従事者を一人も取り残さないことを目的に地元と地方政府の協力によって生活と漁業の復興をもくろんだ岩手県の対比です。協同組合の理念をもって人がつながり自治体も共に協業の復興を目指した岩手は、まさに連帯経済、たすけあい経済を彷彿させる内容で胸が熱くなりました。

「はたらっく・ざま」の取組は、生活クラブとワーカーズ・コレクティブ協会が共同企業体として座間市から事業を受託、座間市内の組合員を巻き込んだ身の丈に合った応援を通して生活困窮者支援の理解と共感が広がっている報告でした。最後に座間市職員の林星一さんから「自治体の福祉政策とつながり経済」をタイトルに断らない相談支援の実践は行政だけでは対応できないことから、地域のさまざまな団体、人との連携関係の広がりによって支援を進めてきた内容でした。

5人の方の報告は、人がつながり・支え合いの経済をそれぞれの地域で自治体も巻き込んで実践している、まさに社会的連帯経済を具体化した希望が見える力強い報告でした。

(おかだゆりこ)

川越のさつまいもは  
おいしいよ～♪

